

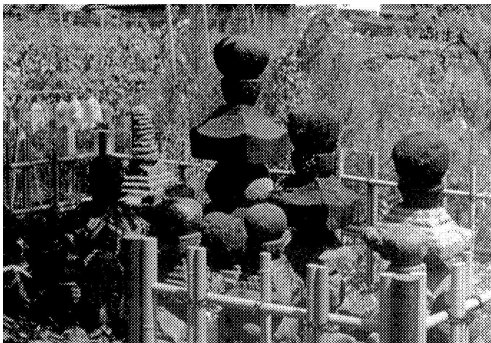
信濃から西国に下った井上氏族

日本先史古代研究会会員 井上秀男

(一) 井上氏(うじ)発祥地を尋ねて

私の先祖は信濃国(長野県)高井郡井上村が発祥地と伝承されている。清和源氏で源頼信の三男の頼季が井上氏を称したのが始まりである。姓氏辞典尊卑分脈寛永系図等の姓氏文献にも、井上三郎頼季=住信濃国、従五位下、掃部助、號乙葉三郎としている。井上一族から出た姓は乙葉・時田・矢井守・桑洞・小阪・高梨・仁科・村上・芳美・安木田・佐久・米持氏等の諸氏が出ている。

今から6年前の平成18年8月に同郷の有志6名で「井上氏発祥の地」の長野県高井郡井上村(現在は長野県須坂市井上)を尋ねる話になって、前もって須坂市の教育委員会に問い合わせた郷土史研究家の神林信雄氏を紹介してもらい、連絡を取り長野県須坂市へ車で高速道を走って10時間以上、須坂ICで降りて神林さんと待ち合わせて合流し須坂市の郷土資料を参考に歴史探訪をしてもらった。井上村の井上城、井上氏館跡、井上氏の墓地、小阪神社などの説明を受け案内をして頂いた。井上氏墓地には五輪塔や宝篋印塔が集められていた。井上一族、その家臣達の墓だろうと話されていた。鎌倉～室町時代頃のものと思われた。



同所 井上氏一族の五輪塔群



長野県須坂市井上村の井上城址

長野県から帰って1ヶ月後に「須高」(スコウ)という一冊の機関紙を届けて戴いた。この機関紙は郷土史研究家の神林さん達の須高郷土史研究会が発行しているもので、その中の囲み記事である「回覧板」の中に、私たちが須坂市を訪れた時のことを「岡山県より井上氏墳墓の地を尋ねて」と題して、私の持参した「井上氏先祖碑」(昭和52年1977年に父井上賀弥太らが建立したもの)の写真を紙面に紹介してくれていたのです。

下の写真は建立当日筆者が写したもの



その後須高21号(昭和60年9月15日発行)の文章に、片山正行氏の執筆による「頼季流井上氏の

西国展開」と題した内容のものと、須高 9 号(昭和 54 年 7 月 1 日発行)の中には「郷土美作国と井上氏」と題して岡山県勝田町の井上四男氏の執筆された本を送付してもらった。信濃高井郡井上村から発祥した井上一族が美作地方に来る動向について触れておられた。勝田郡勝田町の井上氏は三星城の後藤基氏に帰属していた私の先祖と同じであることも解ったのである。頼季流の井上氏は承久の乱で京方に属して西国に移って来た。そして分布している地域は、播磨・丹波・備前・美作に多く見られる。また頼季から出た井上九郎光盛を祖先としている井上氏も見られる。光盛は千曲川横田河原合戦で平家の大軍を破ったことで有名で源平盛衰記に見られる。木曾義仲の西上の養和の乱(1181)の頃から義仲と共に西国の地方へと移った井上一族が、播磨の地方にて時代の動乱の中で色々な諸氏と混合されながら各地方へ分布して行ったのであろう。

(二) 木曾義仲と信濃武士

木曾義仲は源義朝の弟義賢の子で義賢は武蔵国大蔵館(現在の埼玉県比企郡菅谷村)に館を構えていた。木曾義仲 2 才の時に義賢が甥の悪源太義平に殺害され、義仲は乳母の夫中原兼遠が抱いて木曾谷に逃げてその地で成長したと伝えられている。木曾義仲は治承 4 年(1180)4 月 9 日以仁(もちひと)王(後白河法皇の二男)の令旨を受けて、平氏討伐の兵を挙げた。この頃信濃源氏の武士な大部分が義仲に応じ、井上氏等も戦いに参加したと思われる。それは義仲が八幡太郎義家の血を引き一つの源氏という流れを通じて血統的な誉れを感じていたのだろう。義仲の味方となった東信濃の諸氏の中には滋野系としようする、八島氏、落合氏、海野氏、望月氏、桜井氏、根井氏等の諸氏が見受けられる。

養和元年(1182)義仲が平家討伐の軍を起こした頃で根井太郎を越前に送って平通盛を水津に破るなどして、翌年の寿永 2 年(1183)7 月 28 日平家を追って入京し実権を握るに至ったが、以仁王の子北陸宮を擁立しようとして公家たちの反対にあたり、粗暴な振舞等をして後白河法皇と仲が悪くなり、義仲が平氏を西征して備前で大敗すると後白河法皇は、源頼朝に木曾義仲を追討の院宣を下し源範頼・義経の西上軍と宇治勢多で戦ったが破れ近江栗津で元暦元年(1184)1 月敗死した。

義仲に従って戦った北信濃源氏の井上、高梨氏等も寿永 3 年(1184)正月に義仲の首と一緒に京都七条河原に吊るされたと「醍醐雑記」に見えている。また同年 7 月 10 日に井上太郎光盛が駿河国蒲原駅にて殺されるなどした。木曾義仲没後信濃国には守護として比企一族が表面に出てくる。

(三) 比企(ひき)氏の興亡と承久の乱

鎌倉二代将軍源頼家の妻は比企能員の娘で若狭局といって頼家と若狭局の間に一男があり名前を一幡と名乗った。そのような関係で比企一族は強い勢力を誇示する様になり、頼朝譜代の重臣の中には比企氏を不快に思うものも出てきて、北条時政や源頼家の母政子も同様であった。このような機運の高まる頃の建仁 3 年(1203)頼家が病気になり生命が危なくなった時に、北条氏将軍家の所領地の分配を頼家万一の時には、関東二十八ヶ国を長子の一幡に、関西三十八ヶ国を頼家の弟千幡(せんまん＝実朝)に与えるとの方針に決定したので比企能員は不満をもち、北条氏を打倒する計画をしたが、北条方でも比企能員を倒す計画をして北条時政は幕府の参謀大江広元と相談し比企能員の討伐に決心し謀略を考え、北条の館にて薬師如来像の開眼供養を寿福寺の栄西を導師として執り行うこととして、比企能員をこの席に招待し殺害しようと計画し北条時政は工藤五郎を使者に送り、その結果能員は少数の家来と共にその場所にやって来たところを、北条方の武将達によって殺害された。

それを知った能員の子、宗員は一族と共に頼家の長子一幡を奉じて小御所に立て籠もった為に北条時政は比企追討の軍を向けた、それに参加した武将には畠山重忠、三浦義村、小山朝政、同政宗、和

田義盛、結城朝光等の諸氏であつた。比企一族は北条の諸将と戦つた後に火を放って自害して果てた。一幡も炎の中に幼い命を落とした。建仁3年(1203)9月2日の事であつた。俗に比企氏の乱のことである。比企氏没後は北条氏が信濃守護として支配する。そして信濃武士の多くは北条氏の支配下になった。

後に承久の乱(1221)が起こつた時には、信濃武士の多くは幕府方と北条方に分かれて戦つた。この時京方に属した信濃武士の中には北条氏に対する反感から承久の乱に京方に味方する者達がいたという。承久の乱後の新保地頭として多くの信濃武士が西国方面に移住していく。その場所は播磨・丹波・安芸・美作・筑前等の各地へ信濃源氏頼季流の井上氏が分布している。

私の先祖の伝承によると承久の乱の後、西国に移住したと伝えられ播磨の地に住して赤松氏に属したものである。兵庫県赤穂郡上郡町苔縄の法雲寺の諸家大系図の中に井上氏が数多く見受けられる。承久の乱(1221)後中央での状況は、公家の勢力は衰え鎌倉幕府は執権政治(北条)を確立したがその中で武士達(地頭)の勢力が強くなって来る。文永の役(1274)弘安の役(1281)が起こつて幕府は財政面で苦しくなり、対策も効を奏せず結果的に執権政治の基盤が崩れてきた。その様な状況の中で後醍醐天皇は一部の武士を見方にして北条氏を倒し建武の親政を行つたが、これも公家中心に運営されて、武士達が不満を持ち反乱に立ち上がり、足利尊氏は後醍醐天皇を吉野の地に追い、北朝を立て自ら征夷大將軍となり室町幕府を開いた。その後約60年間南北朝の対立が続いた後に南北朝合体となつて一時期は平安を保つが、次第に各地の守護大名が互いに対立を始め、細川勝元と山名持豊が対立し、他の守護大名の争いが混同し全国の守護大名が両軍に分かれて大きな戦に発展して、応仁の乱にいたつて11年間も騒乱が続く。その後は戦国時代の世へと移る。

(四) 播磨国 赤松氏の動向

赤松氏は播磨国を代表する武将で村上天皇の後裔と称されている。建武3年(1336)に赤松則村が北軍(幕府軍)として天皇方の新田義貞を迎え討つ為に、播州白旗城(兵庫県赤穂郡上郡町)を本拠地とした延文元年(1356)播磨守護赤松則村の次男範資が美作守護に貞治3年(1364)則村の三男赤松則祐が播磨と備前の守護職に任ぜられ、備前国と赤松氏との関係が始まった。赤松則祐の跡を継いだのは赤松義則であり、義則は播磨・備前両国の守護職を継承するのである。

明德2年(1391)に山名氏清が室町幕府に叛旗をひるがえすと、義則は一族を連れて幕府方に参陣した。明德の乱である。軍功を挙げた義則は山名義理の保持していた美作守護に任じられ、赤松は播磨・備前・美作の三ヶ国に守護職を保持した。赤松義則は室町幕府の重鎮として活躍をしたが応永34年(1427)70才で没している。義則の跡を継承したのが満祐である。足利義教(6代將軍)の政治に不安を持ち嘉吉元年(1441)に満祐の自宅(西洞院二条)に招いて謀殺した「嘉吉の変」である。その後幕府軍が播磨国へ進軍して来て赤松満祐と弟の義雅と共に自刃して果てた。赤松満祐没後、赤松諸流も次々と討伐され甥の時勝は早世し、時勝の子息政則がいたが、応仁文明の乱の時には細川勝元の東軍に属して戦つたが、その後は衰退の道を歩む。播磨国の赤松氏は南北朝から室町時代、備前美作播磨の守護職として活躍したのであるが、次の勢力が浦上氏に推移していくのである。

(五) 東備前・西播磨・美作における浦上氏の動向

浦上氏が赤松氏と主従的な被官関係を持つようになったのは、南北朝時代になってからと云われ赤松が則村(円心)以来足利政権のもとで守護大名の地位をかくりつしてゆく過程で浦上氏も有力な守護被官の一人としてその勢力を伸ばして来たのである。特に赤松則村の子、則祐の時代貞治年間(1365～)播磨守護に加えて備前守護の職が付与された時、浦上行景が始めて備前守護代に任ぜられて以

降南北朝時代を通して浦上宗隆、助景等浦上一族が備前守護代となり、備前内の和気郡三石、邑久郡福岡に居城を構えるようになって浦上の勢力圏は、西播磨の本貫地から備前地方に伸びてゆく。

南北朝時代の職を引き継いだことで在地との結びつきを深め備前国と浦上氏の関係が強固となったのは、応仁前後の頃の浦上則宗の頃であった。浦上則宗は嘉吉元年(1441)嘉吉の乱によって一時没落した守護赤松家が、長禄2年(1458)三種神器を南朝方から奪回した功で、足利幕府からお家再興をゆるされて以来幼主赤松政則を補佐し、赤松家を嘉吉の乱以前の播磨、備前、美作の三国守護として再興するために尽力を注いだ人物であったと言われている。

次の浦上宗助は備前守護代として三石城(備前市三石)を本拠地として宇喜多能家らと西備前への勢力の拡大を進めていた。浦上宗助の息子村宗の時には浦上氏の勢力は主家の赤松氏を上回って永正15年(1518)ころには守護赤松義村と守護代浦上村宗の対立が完全に表面化して、赤松義村は本城である播磨の置塩城(飾磨郡夢前町)を出陣して浦上村宗の三石城を何度も攻撃したが失敗した。その後浦上村宗は備前・美作を支配していた赤松義村を大永元年(1521)播磨室津にて殺害した(下克上)。義村の子供晴政は置塩城にて備前・播磨・美作の守護として地位を保っていたが、最早や形式的な存在でしかなかった。

そして赤松氏に代わって戦国大名として浦上氏が東備前、美作、西播磨の地域を勢力下に治めるようになってきた。浦上村宗は幕府の所司代にも成ったが、幕府の管領細川高国と結び各地に転戦中享禄4年(1531)6月摂津の天王寺合戦において討死した。村宗の後嫡子浦上政宗は播磨室津城に居り次子の浦上宗景は備前国東部の有力地侍を味方に天神山城(和気郡佐伯町田土、岩土)に室津から移って居城とする。

(六)浦上氏から宇喜多氏への動向

浦上宗景は兄の政宗との間に不和を生じるようになって、争いあう状況の中で兄の政宗は赤松氏の残党にとって討たれる。赤松氏に属していた配下の者たちは天神山城の宗景に身を寄せる者もいたという。この頃我が家の伝承によると井上六郎家信は、室津に住んでいた時は赤松氏に仕えていたが、赤松氏衰退の後天神山城主浦上宗景に仕えたと記してある。井上六郎家信は天正11年(1583)4月5日没法名は常悦、妻は備前国大中山衣笠山城主中山五郎左衛門光能の娘と記している。中山五郎左衛門も浦上宗景に従っていた一人であった。

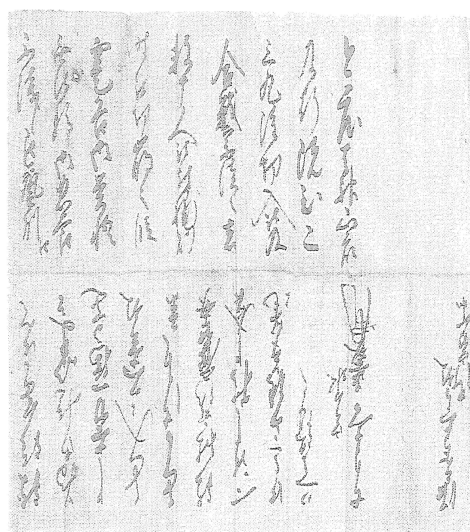
天神山城は美作から備前東部を南下し県下の三大河川の吉井川中流の左岸に位置し険しい岩肌を見せる山城である。自然の要害を備えた天神山城にも下剋上の波紋が迫ってくる。各地の有力な戦国大名が勢力を伸ばし美作地方には天文の頃から尼子氏の進出があり天文21年(1552)に尼子晴久は將軍足利義輝から伯耆、出雲、美作、因幡、備前、備中、備後の七ヶ国の守護に補せられていたので天文年間の美作に於いては、浦上氏と尼子氏が勢力を争う状況であった。永禄の初頭から西方から毛利氏の勢力が備中にも伸び、尼子氏の衰退にともなって、備中から美作地方に進出して浦上氏の勢力と争う様になり、備前地方では永禄の頃から浦上宗景の家臣であった、宇喜多直家が勢力を増して来る。

宇喜多氏は備前国邑久郡邑久郷(岡山県邑久郡)を本貫地とする土豪で宇喜多氏が備前の守護代浦上氏の有力な武将としてくるのは宇喜多能家からで、能家は浦上村宗に仕えていたが攝津の天王寺で村宗が討死したのち邑久郡豊原庄の砥石城に隠退していたが、天文3年(1534)6月30日浦上氏の部将の島村豊後守に攻められて自刃し果てた。能家の死後宇喜多氏は一時期衰えていたが能家の孫直家の時になって勢力を伸ばすようになって来る。宇喜多直家が表面化するのは天文12年(1543)浦上宗景に仕えた頃から始まり、天文13年邑久郡乙子城主となり、永禄2年(1559)に浦上の部将で祖父能

家の仇であった島村豊後守が上道郡沼城主であった中山備中守と内応して浦上宗景に叛意を持った為に宇喜多直家は浦上宗景の命をうけて、島村・中山両氏を討取り、この頃に本拠を沼城(亀山城)に移し、上道郡一帯を支配下に治めるように至ったが、依然として東部備前地方は主君浦上宗景が勢力を保持していた。しかし宇喜多直家は徐々に主君浦上宗景の天神山城を謀略をめぐらして攻略するのである。

(七)文献から見た和気郡天神山落城年月日について

世に言う戦国時代(天文・天正年間)この岡山(備前・備中・美作)に於いても有力な豪族の進出によって下剋上の世の中が展開される。軍記物語等に書かれている天神山の浦上宗景についても、和気郡誌、和気の歴史、吉備群書集成(巻 3 巻)天神山落城記、その他の文献に見られる。備前軍記等もそうである。これらの諸書には天神山落城の年月日が天正 5 年(1557)8 月となっている。私も諸本を見てその様に思っていた。しかし数年前「熊山町史調査報告書四」平成 4 年 3 月号(熊山町史編纂委員会)発行の中に「新出沼元家文書」から見た沼元氏の性格と題して広島大学文学部教授文学博士の岸田裕之先生の執筆された文章の中に、山口県の旧家八木・香川家から発見された、宇喜多直家が戦国時代末頃天正 3 年(1555)頃に直家麾下(きか)に属していた沼元新右衛門尉に関わる直家の書状として紹介されている。その文書の中には和気郡天神山城合戦の様子が文書として書かれ、天神山落城は天正 5 年 8 月ではなく実は天正 3 年(1555)9 月頃と見るのが正しいのではとの見解の文面です。



図版 5 宇喜多直家書状

一 宇喜多直家書状(折紙)
今度天神山衆及行、既至二三丸離切入、被及合戦、宗徒之者數十人被討捕、則時被切崩之段、寔各御宣悟無比類御忠節不浅候、即、芸州江致註進候、先々為御悦、以使者申候、太刀一腰・馬一疋進入候、久松殿近日御下之条、致披露、褒美可被申候、猶申合口上、不能多筆候、恐々謹言、
七月十一日
沼元与太郎殿
御宿所
直家(花押)

註 この書状は、沼元与太郎が浦上宗景麾下の天神山衆と合戦し、主だった者を討取るなど戦果をあげたことについて、宇喜多直家がそれを毛利氏に進註し、自らは使者を送って褒賛したものである。
久松殿とは、宇喜多直家が岡山に招き、浦上氏の正統と称して浦上宗景に対抗した浦上久松(宗景の兄政宗の孫)のことである。

直家の書状 半紙＝折り紙

解説文書

この書状は沼元与太郎が浦上宗景麾下の天神山衆と合戦し、主だった者を討取るなど戦果を挙げたことについて、宇喜多直家がそれを毛利氏に進註し、直家は使者を送って賞賛した文章で、文面の中、久松殿とあるのは、直家が浦上氏の正統として宗景の兄の政宗の孫である浦上久松のことである。沼元氏の拠っていたのは小松城と見え(現在の久米郡久米南町下二ヶ)。また天正 2 年(1574)3 月 13 日の原田三河守、原田三郎左エ門尉(久米郡中央町原田を本拠地とする稻荷山城の領主)宛て宇喜多直家起請文に浦上氏と戦った文面が紹介されている。

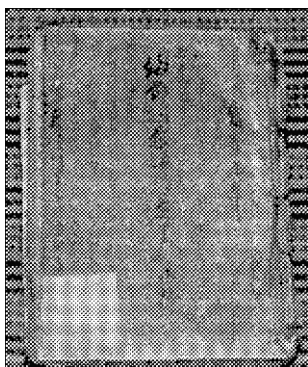
(八)天神山城落城後の美作国井上氏の動向

浦上宗景の居城は宇喜多直家の軍勢によって落城(宗景一代)45年間の居城であった。落城の節に少数の家臣達と共に播磨に落ち逃げて、のちに九州の黒田孝高に身を寄せたとの説もある。宗景の配下の者たちも各地方に流浪の身となり落ちて行った。その節に私の先祖の井上一族も例外ではなかった。井上六郎家信に4人の子供があつて、長男井上山兵衛尉政家(英田郡美作町阿蘇の井上氏祖)二男井上次郎三郎源政康(赤磐市是里物理)の井上氏祖で浦上宗景の景の一字を賜つて政景とも名乗った。三男井上新兵衛政重(英田郡美作町海内)井上氏祖、四男井上又八郎政信(英田郡美作町下倉敷)の井上氏祖があつて、その地で今日まで続いている。

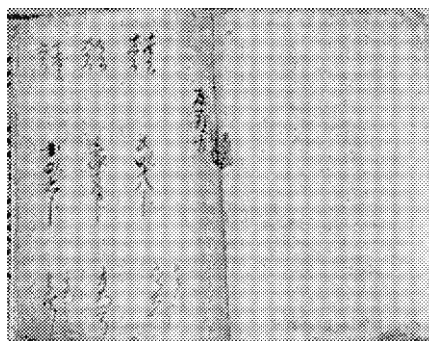
私の祖先は井上次郎三郎源政景であり、妻は英田郡河合郷の城尾城主渋谷権之丞国重の娘千代姫で浦上宗景の末子の太郎三郎君の乳母と伝えられ、のちに名前を改めて千歳(ちとせ)と名乗る。墓は私の家の裏の畑の中に自然石で祭られ劔の御霊(つるぎのみさき)と称されている。法名は妙得尼である。天神山落城後、数年は流浪の身として各地を転居した中で、美作の地で三星城主の後藤勝基の配下として井上一族が居たので頼って行き後藤氏の配下としていたが、後藤氏も浦上宗景を主君としていたので、三星山城にも宇喜多直家の勢力が伸びて宇喜多家の部将の花房助兵衛・延原弾正等の攻撃によってついに天正7年(1579)5月三星城は落城し後藤氏は滅亡するのである。

三星城落城の様子を記したものに、吉備群書集成の三巻の中に「三星軍伝記」として書かれている。その合戦の文面の中に「弟の井上次郎三郎を呼び出して兄井上山兵衛尉政家の手傷の様子を尋ねさせる云々……」と記された箇所がある三星合戦後は民家に潜居し。井上次郎三郎源政康の子供の井上次郎右衛門政隆の頃には、関が原の合戦も終わって徳川時代になり、人里離れた地を求めて赤磐市是里字物理の地に帰農するのである。

公文書の畠方備前国赤坂郡是里御検地帳、慶長9年(1604)の中に屋敷方として五畝十八歩、もどろい二郎右衛門と記録されている。井上次郎右衛門政隆から私(筆者)で16代である。



備前国赤坂郡是里御検地帳 表紙



もどろい二郎右衛門の屋敷方として

五畝十八歩の記載箇所

天神山落城400年記念として昭和52年井上一族一同の協賛によって「井上氏先祖碑」の建立することが出来た。(写真21P参照)もうあれから38年の月日が流れた。私も幼少のころから年1回春3月井上一族の老いも若きも集って、井上先祖祭を続けてきた。今から6年前に有志で井上氏発祥の地を訪れ井上氏の歴史について改めて知ることが出来た。今では田舎の人達も人数が少なくなっているが、井上先祖祭は続いている。山村の小さな「絆」である。故郷の家からは遠望ではあるが天神山城の峰を望むことが出来る。今から400年前に先祖のいた天神山を望める場所に居住した先祖の配慮に触れた時、何か心に暖かいものを感じさせられるのである。